三重県埋蔵文化財調査報告103

一般県道度会玉城線道路改良事業に伴う

上の山遺跡発掘調査報告

—度会郡玉城町勝田—

1992・3

三重県埋蔵文化財センター

序

広大な面積の圃場整備事業や道路改良及び河川改修など公共事業、また民間企業による開発事業に伴う埋蔵文化財保護の問題は年々増加の傾向にあります。

三重県教育委員会では、文化財保護行政の一環として、各開発関係部局の事業を照会し、事業予定地域内の文化財の確認とその保護に努めてまいりました。今後ともなお一層、関係者への埋蔵文化財の理解と協力を深めていきたいと考えておりますので広く県民の皆様方の理解と協力をお願いする次第であります。

ここに報告する度会郡玉城町所在の上の山遺跡は、一般県道度会玉城線（通称サニーロード）道路改良事業の施行に先立ち、事前の協議の結果、発掘調査を実施し、記録保存されたものです。弥生時代前期から鎌倉時代後半までの人々の生活のあとが明らかになりました。特に弥生時代前期の竪穴住居は県下でも発見例が少ないものであり、県下の弥生文化の伝播を考えるうえで貴重な結果が得られました。これらの祖先の残した歴史遺産は、貴重な財産として保護され、後世に伝えていくとともに、今後の文化の向上発展の基礎として活用していかなければなりません。

調査にあたっては、県土木部道路建設課、伊勢土木事務所、玉城町をはじめ、地元の多くの方々の惜しみないご理解とご協力を賜りました。文末ながら、記して深く感謝の意を表します。

平成４年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　中　林　昭　一

例　　言

1．本書は、三重県教育委員会が、三重県土木部から執行委任を受けて実施した一般県道度会玉城線道路改良事業に伴う度会郡玉城町勝田に所在する上の山遺跡の発掘調査の結果をまとめたものである。

2．調査は下記の体制で行った。

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター

主事　上村安生

主事　浜口　元

3．調査にあたっては県道路建設課、伊勢土木事務所、玉城町ならびに地元各位の方々に協力を得た。

4．発掘調査後の出土遺物の整理は上記担当者の他、管理指導課が行った。

5．本書の執筆・編集は、上村が担当した。

6．当遺跡の位置は国土座標第Ⅵ系に属している。挿図の方位は全て座標北を用いた。

7．本書で報告した記録および出土遺物は三重県埋蔵文化財センターで保管している。

8．写真図版の遺物の番号は、実測図の番号と対応させてある。

9．本書で用いた遺構表示略記号は下記による。

ＳＨ；竪穴住居　ＳＢ；掘立柱建物　ＳＫ；土坑　ＳＤ；溝　ＳＡ；塀

ＳＸ；方形周溝墓

10. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください

本文目次

Ⅰ．前　言 …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査の方法と経過 …… 1
Ⅱ．位置と歴史的環境 …… 2
Ⅲ．遺　構 …… 6
　1　弥生時代の遺構 …… 6
　2　平安時代の遺構 …… 9
　3　鎌倉時代の遺構 …… 10
　4　時期不明の遺構 …… 12
Ⅳ．遺　物 …… 13
　1　縄文時代の遺物 …… 13
　2　弥生時代の遺物 …… 13
　3　鎌倉時代の遺物 …… 15
Ⅴ．結　語 …… 15

図版目次

ＰＬ．１　調査前風景／調査区全景
ＰＬ．２　北調査区全景／中央調査区全景
ＰＬ．３　ＳＨ12／ＳＸ１
ＰＬ．４　ＳＤ３、ＳＸ４／ＳＢ20・21、ＳＡ22
ＰＬ．５　ＳＢ16・17／ＳＫ８・９
ＰＬ．６　ＳＫ10・11／ＳＫ15
ＰＬ．７　出土遺物（１）
ＰＬ．８　出土遺物（２）

挿図目次

第１図　遺跡位置図
第２図　遺跡地形図
第３図　調査区位置図
第４図　ＳＨ12実測図
第５図　遺構平面図
第６図　ＳＸ１・ＳＸ４・ＳＤ３実測図
第７図　ＳＢ20・ＳＢ21・ＳＡ22実測図
第８図　ＳＢ16・ＳＢ17・ＳＢ18・ＳＢ19実測図
第９図　ＳＫ８・ＳＫ９実測図
第10図　ＳＫ10・ＳＫ11実測図
第11図　ＳＫ15実測図
第12図　出土土器実測図（１）
第13図　出土土器実測図（２）

表目次

第１表　出土土器観察表

Ⅰ．前　　言

１．調査に至る経過

三重県教育委員会では、国および県にかかる各種公共事業に関して、各開発関係部局の事業を照会し、事業予定地域内の文化財の確認とその保護に努めてきている。

こうした中で三重県土木部道路建設課より、一般県道度会玉城線道路改良事業の事業計画の連絡を受けた三重県埋蔵文化財センターでは、平成元年度に事業予定地内の遺跡分布調査を実施した。その結果、事業予定地周辺には周知の遺跡として上の山古墳群が存在し、一部が事業地内に含まれることが判明した。また、周知の遺跡として知られていた上の山遺跡の範囲も事業地内まで拡がることも判明した。
さらに、新発見の遺跡として小清水遺跡が確認された。

これらの遺跡について平成２年度に三重県埋蔵文化財センターが試掘調査を実施したところ小清水遺跡については、遺跡の縁辺部にあたり、工事の施工にあたって支障がないと判断された。上の山古墳群中の当該部分についても自然地形であると判断された。しかし、上の山遺跡については、2,400 ㎡について遺構が確認された。

上の山遺跡の取り扱いについては、その保存に努めるように県土木部・伊勢土木事務所と協議を重ねてきた。しかし、この道路が地域住民の生活道路として必要であるため、やむなく事前の調査を実施することになった。

調査は県土木部の執行委任を受けて平成３年６月10日から同年７月22日まで実施した。

２．調査の方法と経過

現況は畑及び果樹園である。まず、遺構面に影響のない範囲での表土除去を重機で行った。

調査は、４ｍ×４ｍのグリッドを設定し、調査区の北から南へとむかって進めた。但し、調査区を横断する現道が４本あり、うち２本については分断すると果樹園の消毒作業に弊害をもたらすとの地元の要望により分断せずに調査区を３地区に分け、調査を進めることとなった。調査区の周囲で排土を置く用地が確保できなかったため、北と南の調査区では路線内の延長部に、遺構の希薄な中央の調査区については調査区を縮小し、遺構の状況に応じ拡張することとし、路線内に排土場所を求め調査を進めた結果、調査面積は 1,600 ㎡となった。

調査日誌（抄）

月	日	内　容
6	10・11	調査区表土を重機にて除去。
6	12	資材搬入。小地区設定。
6	13	北調査区遺構検出開始。
6	14・17	北調査区遺構検出及び掘削開始。
6	18	ＳＸ４の南周溝より壷口縁部出土。
6	19	ＳＤ２の下層にＳＸ１検出。
6	21	北調査区写真撮影。中央調査区開始。
6	25	中央調査区遺構検出。柱穴、土坑検出。
6	26	ＳＫ８・９掘削、山茶椀、土師器出土。
6	27・28	中央調査区の南部遺構検出・掘削。
7	1・2	ＳＢ17付近など２ヵ所を拡張して調査。
7	3・4	南調査区遺構検出。円形プランの竪穴住居ＳＨ12、掘立柱建物ＳＢ20・21等検出。ＳＨ12の主柱穴・周溝を確認。
7	9	南調査区ＳＨ12の現道にかかる部分の拡張調査。
7	10	中央及び南調査区写真撮影。
7	11～18	ＳＸ１・４、ＳＤ３、ＳＨ12および調査区東壁の土層を実測。
7	19	調査区全体の掃除。
7	22	調査区全体の空中写真測量実施。調査終了。

II. 位置と歴史的環境

南伊勢地方には櫛田川と宮川という、二大河川がある。どちらも、有数の多雨地帯で知られる大台ヶ原山の最高峰日出ヶ岳をはじめ、県境となっている台高山脈の山々をその水源地としており、中流域では河岸段丘が連続的に発達し、山地を縫うようにして流れている。山間部から抜け出た下流域では、幾度も流れを変え広大な氾濫平野を形成している。

玉城町は、この二大河川にはさまれた地域にあり、町域のほぼ中央部をさらに外城田川という中小河川が貫流している。

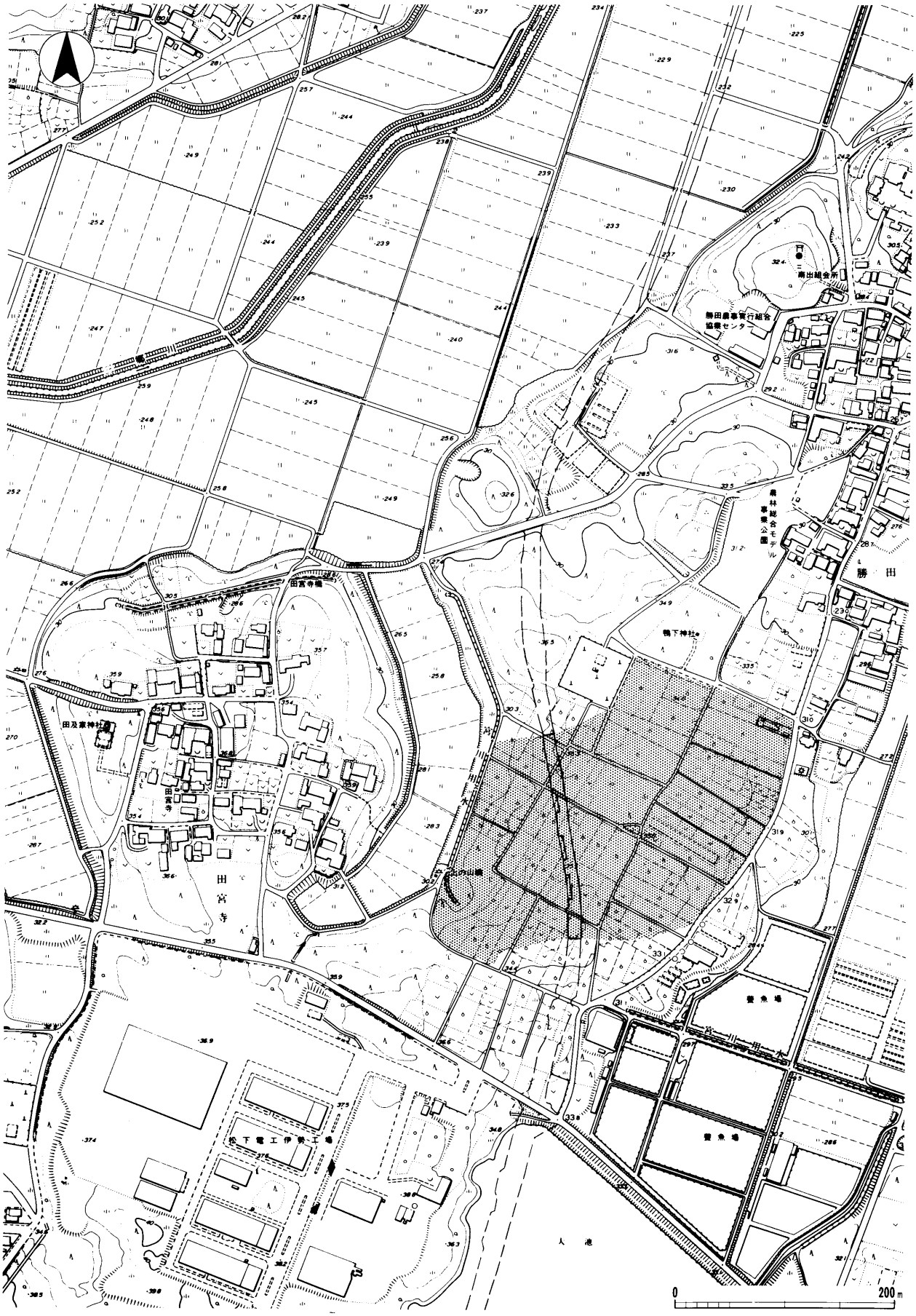
上の山遺跡(1)は、国束山系から北へ派生する低丘陵上に立地する。標高は35m前後である。行政上は、度会郡玉城町大字勝田字上の山に属する。

当地域には、上述したような低丘陵が発達し、旧石器時代以来、多くの人々が生活を営んでおり、数多くの遺跡が確認されている。以下、周辺の歴史的環境について時代をおってその概略を述べる。

まず、旧石器時代の遺跡であるが、当地域は県下で最も分布が濃密な地域として知られている。その内容については表採資料が中心であるが、かなり明らかになってきている。なかでも、上地山遺跡(2)は昭和58年と59年に発掘調査が行われており、国府型ナイフ形石器をはじめ、チャート製の小型ナイフ形石器、舟底形石器、掻器、楔形石器、石核等が出土している[①]。当遺跡の東北約700mの東伸遺跡(3)では、ナイフ形石器、細石刃核、掻器、石核等がまとまって表採されている[②]。この他、仲野遺跡(4)、西世古遺跡(5)、アレキリ遺跡(6)、角垣内遺跡(7)、ミドロ遺跡(8)が存在する[③]。これらの遺跡は、ミドロ遺跡を除き、低平な丘陵や段丘が平野部に突き出た末端部に立地するという特徴が指摘されている[④]。

縄文時代の遺跡は、当地域周辺においては石鏃や剝片が出土した寺起遺跡(9)、えなど遺跡(10)、狼谷遺跡(11)、明豆遺跡(12)、東村遺跡(13)が前方に低地を控える丘陵端部に分散的にみられるが、いずれも少量の土器と石器が確認されている。時期的に

第1図　遺跡位置図（1：50,000）（国土地理院　国束山・伊勢1：25,000）



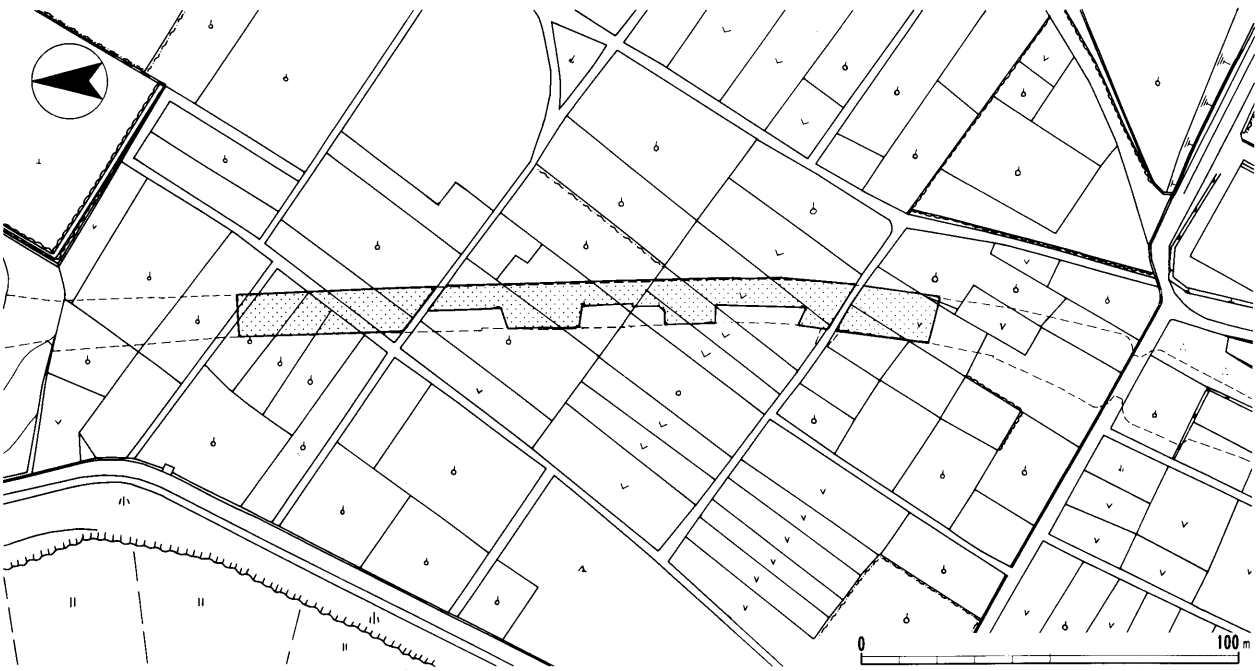
第２図　遺跡地形図（1：5,000）

は後期が中心となるようであるが[5]、詳細は明らかではない。恐らく、キャンプサイト的な性格の遺跡と推定されている。これに対して、宮川を渡った右岸段丘中位面上には、岩偶の出土で著名となった佐八藤波遺跡(14)がある。後期を中心とした土器がかなりまとまって採集されており、石器も多数の石鏃や、スクレイパー、石斧、石錐、石錘、石棒等が発見されている。後期を中心とした右岸側の拠点的遺跡と考えられる[6]。

弥生時代の遺跡は、前・中期については稀薄な状況である。前期の遺跡としては、仲垣内遺跡(15)、西世古遺跡、狼谷遺跡、山殿西遺跡(16)がある。仲垣内遺跡では新段階に属する壷、甕等が土坑から出土している[7]。その他の遺跡についても新段階に属するものと思われる。中期においては、月よべ遺跡(17)、離宮山遺跡(18)、小社遺跡(19)で後半の土器が発見されているのみである[8]。しかし、後期になると遺跡は急激に増加し、南勢地方でも屈指の大遺跡が左岸段丘中位面にほぼ帯状に形成されている。南からウエ松遺跡(20)、小社遺跡、中楽山遺跡(21)、野垣内遺跡(22)、掛橋遺跡(23)等である。中でも発掘調査が実施された中楽山、野垣内の各遺跡では、竪穴住居や方形周溝墓が検出されており、南勢地方の欠山期から古式土師器への編年上の標準資料と位置づけられる土器が多数出土している[9]。眼下に広大な沖積地を見下ろす中位段丘上に安定的な集落形成が行われたことが推定される。この他に、時期は特定できないが杉山遺跡(24)、田宮寺遺跡(25)、大池遺跡(26)、さみだれ遺跡(27)では石包丁が採集されており、付近の低丘陵上に点々と住居の跡が残されている。さらに、当遺跡の北約400mにある勝田遺跡(28)では弥生時代後期末から古墳時代初頭の竪穴住居が検出されている[10]。

古墳時代にはいると前代に左岸段丘上で盛況した大規模な集落は一斉に解体し、拡散していったと思われる[11]が、集落跡の調査例はほとんどなく、具体相は不明である。こういった状況のなかで、古墳群の形成は5世紀の前半以降活発な展開をみせている[12]。4世紀に遡るものとしては小社遺跡採集の石釧[13]と下田辺茶臼山古墳(29)の台付壷[14]が注目されているが、いずれも偶然の出土によるものである。

玉城町南部の古墳の分布については、八柱神社古墳群(30)、上の山古墳群(31)、前岡古墳群(32)、空池古墳群(33)が分布する田宮寺周辺地域、ぼうず山A・B古墳群(34)、正来寺古墳群(35)が分布する蚊野丘陵周辺地域、矢塚古墳群(36)、鉄砲塚古墳群(37)が分布する宮古地域に大別される。さらに外城田川左岸地域には、全長33.5mの前方後円墳野田古墳(38)、茶臼山塚古墳群(39)、塚田古墳(40)、豆塚古墳群(41)が分布する。



第3図　調査区位置図（1：2,000）

飛鳥・奈良時代の遺跡としては原古窯址群(42)がある。全10基のうち、6号窯と7号窯が調査されており、7世紀末から8世紀初頭の杯、長頸壺等が出土している[15]。従って、当然これらの生産に直接従事した工人、或いは生産を招来する背景となった勢力に関連する遺跡が、周辺に存在することが予想されるが、現時点では明らかでない。

平安時代の遺跡としては、斎王参宮の際の離宮である離宮院跡(18)がある。発掘調査では八脚門址が検出されている[16]。この他、神宮関連の遺跡としては岩出遺跡(43)がある[17]。神宮関連の遺跡以外には、野垣内遺跡、赤垣内遺跡(44)、小ばし遺跡(45)等があげられる。野垣内遺跡では掘立柱建物5棟の他、同時期の竪穴住居も見つかっており、当時の一般庶民の生活の一端をみることができる[18]。赤垣内遺跡では平安時代末頃の総柱建物を含む掘立柱建物が検出され[19]、小ばし遺跡では土製支脚が出土している[20]。

中世以降の遺跡には、掘立柱建物や井戸、区画溝が検出され屋敷地とみられる楠ノ木遺跡(46)[21]や掘立柱建物や井戸、溝、土坑を多数検出している蚊山遺跡(47)[22]がある他、古くからの開発、開墾に伴って遺物が出土している遺跡にヒムロ遺跡(48)、平内山遺跡(49)、鳥取山遺跡(50)等がある。

中世城館には田丸城址(51)、坊主山館址(52)、山神城址(53)、山上東城址(54)、岩出城址(43)、寺山城址(55)がある。田丸城址は延元元年(1336)に北畠親房、顕信父子が築城して以来、南朝方の拠点となり、南北両朝合一後も北畠国司の支配下に置かれた。永禄12年(1596)に織田信長の大河内城攻めの際の和議によって、次男信雄が城主となり、以後、堀、石垣、土塁を備えた近世的平山城として生まれ変わる。江戸時代には、和歌山藩家老の久野家が城主となり、八代続いて明治の廃城を迎える[23]。

以上、上の山遺跡周辺の歴史的環境について、考古学的成果を中心に述べた。当地域が旧石器時代以来、多様な歴史を展開してきたことが分かるであろう。

〔註〕

① 奥義次・大西素行・御村精治『上地山遺跡発掘調査報告』1985年　玉城町教育委員会
② 皇学館大学考古学研究会『玉城町南部の遺跡』1982年
③ 註②　文献に同じ
④ 奥義次「三重県の遺跡」『日本の旧石器文化3』1976年
⑤ 奥義次「第二章参考資料ー宮川流域周辺の先史遺跡と遺物ー」『大宮町史歴史編』1987年　大宮町
⑥ 岩中淳之『佐八藤波遺跡発掘調査報告』1990年　伊勢市教育委員会
⑦ 小玉道明「度会郡玉城町仲垣内遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1979年　三重県教育委員会
⑧ a、小玉道明・長谷川博「度会郡玉城町月よべ遺跡」同上
b、御村精治・大西素行・山澤義貴・小玉道明『離宮院跡発掘調査報告』1980年　小俣町教育委員会
⑨ a、下村登良男「伊勢市上地町中楽山遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1973年　三重県教育委員会
b、下村登良男「伊勢市上地町野垣内遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1979年　三重県教育委員会
⑩ 倉田直純・東浩成『勝田遺跡発掘調査報告』1988年　三重県教育委員会
⑪ 註⑩　文献に同じ
⑫ a、下村登良男「河田古墳群周辺の古墳分布」『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』1986年多気町教育委員会
b、前川嘉宏「玉城丘陵上の古墳群について」『ふびと』36号　1979年　三重大学歴史研究会
c、註②　文献に同じ
⑬ 註②　文献に同じ
⑭ 註⑫b　文献に同じ
⑮ 三重大学原始古代史部会「度会郡玉城町原6号・7号窯発掘略報」『ふびと』22号　1964年　三重大学歴史研究会
⑯ 註⑧b　文献に同じ
⑰ 瀬古吉久他「岩出の遺跡」『歩跡』3号　1976年　皇学館大学考古学研究会
⑱ 註⑨b　文献に同じ
⑲ 小玉道明「度会郡玉城町赤垣内遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1979年　三重県教育委員会
⑳ 下村登良男「度会郡玉城町小ばし遺跡」同上
㉑ 伊藤裕偉「楠ノ木遺跡」『近畿自動車道勢和～多気埋蔵文化財発掘調査報告ー第3分冊ー』　1991年三重県教育委員会　三重県埋蔵文化財センター
㉒ 小坂宜広・稲本賢治・角谷泰弘・前川嘉宏「蚊山遺跡」『近畿自動車道埋蔵文化財発掘調査概報Ⅵ』　1990年　三重県教育委員会　三重県埋蔵文化財センター
㉓ 『三重県の地名』日本歴史地名大系24　1983年

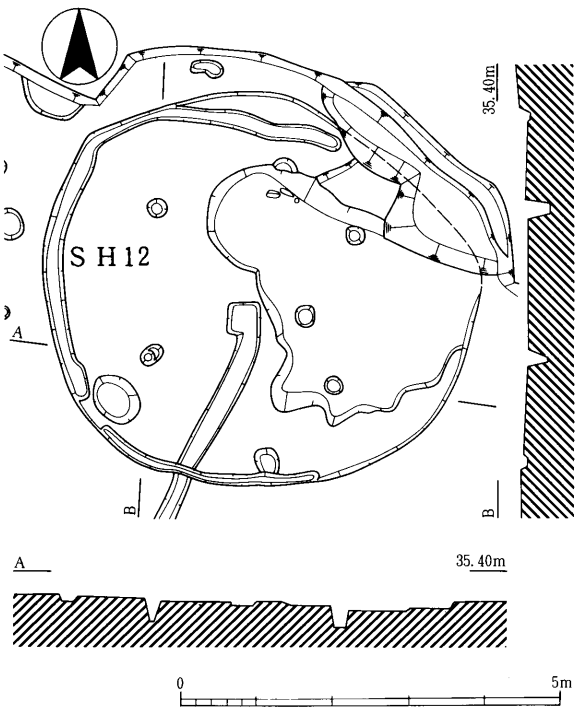
III. 遺　　構

遺跡の層序は基本的に第Ⅰ層：表土、表土の直下で燈褐色土の地山となっている。表土の厚さは20～30cmである。遺物は表土に若干含まれるが、明確な遺物包含層は見られない。これは開墾により削平されているためである。検出された遺構は、竪穴住居1、方形周溝墓2、掘立柱建物6、塀1、土坑4、溝7であるが、果樹園に伴う撹乱の溝や果樹の支柱穴が多数確認されている。

1．弥生時代の遺構

A．竪穴住居

SH12　南調査区の北端で検出したもので、現道に一部がかかっており、その部分については拡張をして検出した。平面形は東西5.76m、南北5.16mのほぼ円形で、床面積は約23.4m²である。竪穴はほぼ垂直に掘り込まれ、検出面からの深さは、平均8cm東端では3cm前後と浅い。埋土は暗褐色土である。周壁から1.2m前後離れた4つのピットが主柱穴と考えられる。柱間は南北が2.0m、東西が北で2.60m、南で2.48mである。主柱穴の規模は直径25cm前後の円形、深さは38～48cmである。周溝は幅16～24cmで東側では確認できなかった。また、南西端で一度途切れている。その付近には長径70cm、短径54cm、深さ54cmのピットがあり、他のピットより規模が大きく貯蔵穴の可能性がある。



第4図　SH12実測図（1：100）

炉は確認できなかったが、住居の北端に深さ20cm前後の小土坑がある。この土坑内の河原石のある付近には若干の焼土が確認され、あるいは炉の可能性もある。埋土は暗茶褐色土で、灰黄褐色土の床面を切り込んでいる。

出土遺物には、弥生時代前期新段階の時期の壷(2～17)、甕（18～23）があり、サヌカイトの剝片もある。

B．方形周溝墓

SX1　北調査区の北西端で東と北にあたる周溝の一部を検出した。東溝は幅1.28m、検出面からの深さ40cm前後（以下、深さを記述する場合は検出面からの深さをいう）、北溝は幅1.92m、深さ40cm前後である。両者の溝はつながらず北東の隅は陸橋を持つが、全体の形態と規模は不明である。どちらも時期不明の溝SD2を掘り下げて検出した。溝の層位は第Ⅰ層―暗灰褐色土(SD2埋土)、第Ⅱ層－橙茶褐色土(SX1埋土)である。出土遺物には、弥生時代中期後半の壷（22）がある。図示したものは底部であるが体部の破片もやや離れて出土している。供献された土器が転落したものと考えられる。

SX4　SX1のすぐ東に位置する。西と南にあたる周溝を検出した。西溝は幅1.16m、深さ50cm前後、南溝は幅1.2m、深さ40cm前後である。西溝の長さ7.04mに対し、南溝の長さは4.64mであることから長方形プランの形態と考えられ、少なくとも三方に陸橋をもつ。溝の層位については、南溝は第6図に図示したが、西溝は第Ⅰ層－橙茶褐色土、第Ⅱ層－暗灰褐色土、第Ⅲ層－暗橙褐色土である。出土遺物には、弥生時代中期後半の壷(25・26)がある。いずれも南周溝から出土している。

C．溝

SD3　SX4の南溝と40cm程離れ並行する溝である。埋土は橙褐色土と灰茶褐色土の混入土で、細

第5図　遺構平面図（1：200）

片のため時期は不明であるが弥生土器と縄文時代晩期の土器（1）が出土している。溝の性格は不明である。

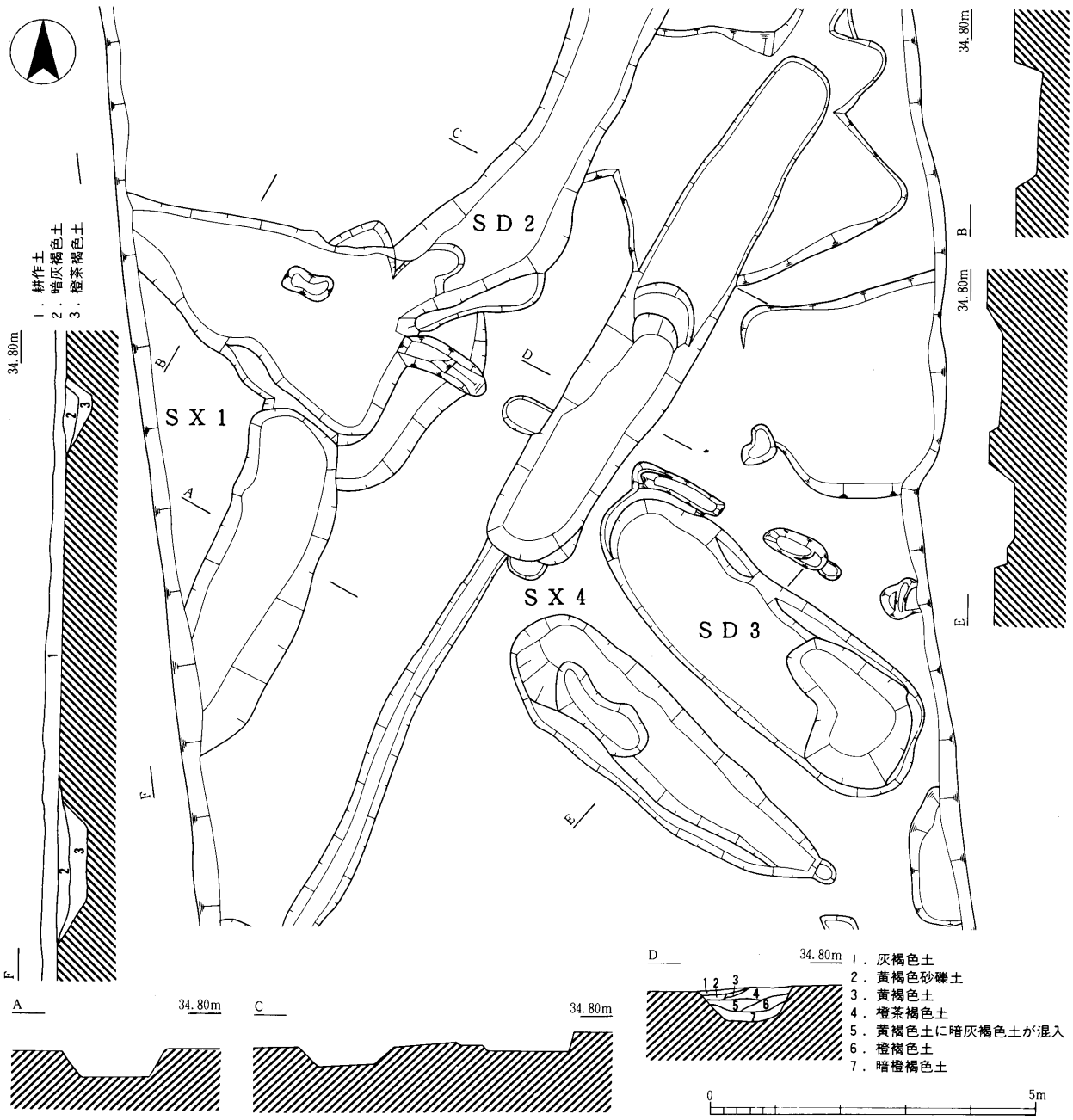
2．平安時代の遺構

A．掘立柱建物

ＳＢ20　南調査区の南端で検出された３間×３間の総柱建物で、建物の規模は桁行4.5m、梁行3.9mである。棟方向はＥ11°Ｓである。柱掘形は一辺60cm前後の隅丸方形で、柱痕跡は30cm前後の円形である。柱掘形の埋土（暗褐色土に黄褐色土が混入する）からは平安時代中期（10世紀前半代）の遺物が出土している。

ＳＢ21　ＳＢ20と一部が重複する２間×１間の南北棟の建物である。建物の規模は桁行4.0m、梁行2.5mである。棟方向はＮ３°Ｗである。柱掘形は四隅の柱が一辺60～70cmの隅丸方形、桁行中央の柱が30cm前後の円形である。柱掘形埋土（暗褐色土）の遺物はＳＢ20と差はなく、建物の前後関係は不明である。ＳＢ21は調査区の端で確認されており、更に東へ続く可能性もある。

B．塀



第６図　ＳＸ１・ＳＸ４・ＳＤ３実測図（1：100）

ＳＡ22　ＳＢ20の北で東西に３間分を検出した。柱間は2.15mである。柱掘形は70cm前後の円形であるが、西端のものはやや小さい。柱掘形の埋土（灰茶褐色土に黄褐色土が混入する）から遺物は出土していない。塀の方向はＥ３°Ｓである。ＳＢ21に伴うものと思われるが、方向が一致しない点に疑問が残る。

３．鎌倉時代の遺構

Ａ．掘立柱建物

ＳＢ16　中央の調査区の北よりで検出した。南北３間、東西２間を確認したのみで建物はさらに東へ続くと考えられる。柱間は、南北が2.15m、東西が2.1m である。棟方向は北に対して24°東へ振っている。柱掘形は径30cm前後の円形である。

ＳＢ17　ＳＢ16と重複する建物で南北は４間で、東西は３間を確認している。東西は更に東へ続く可能性がある。柱間は南北が1.95m、東西が2.1mである。棟方向は北に対して20°東へ振っている。柱掘形は径30cm前後の円形である。一部の柱穴は15cm前後の平らな石を根石としている。

ＳＢ18　１間×２間の東西棟の建物である。柱間は桁行の西が2.0m、東が2.25m、梁行は1.75mである。棟方向はＥ17°Ｎである。ＳＢ17と同じく根石をもつ。

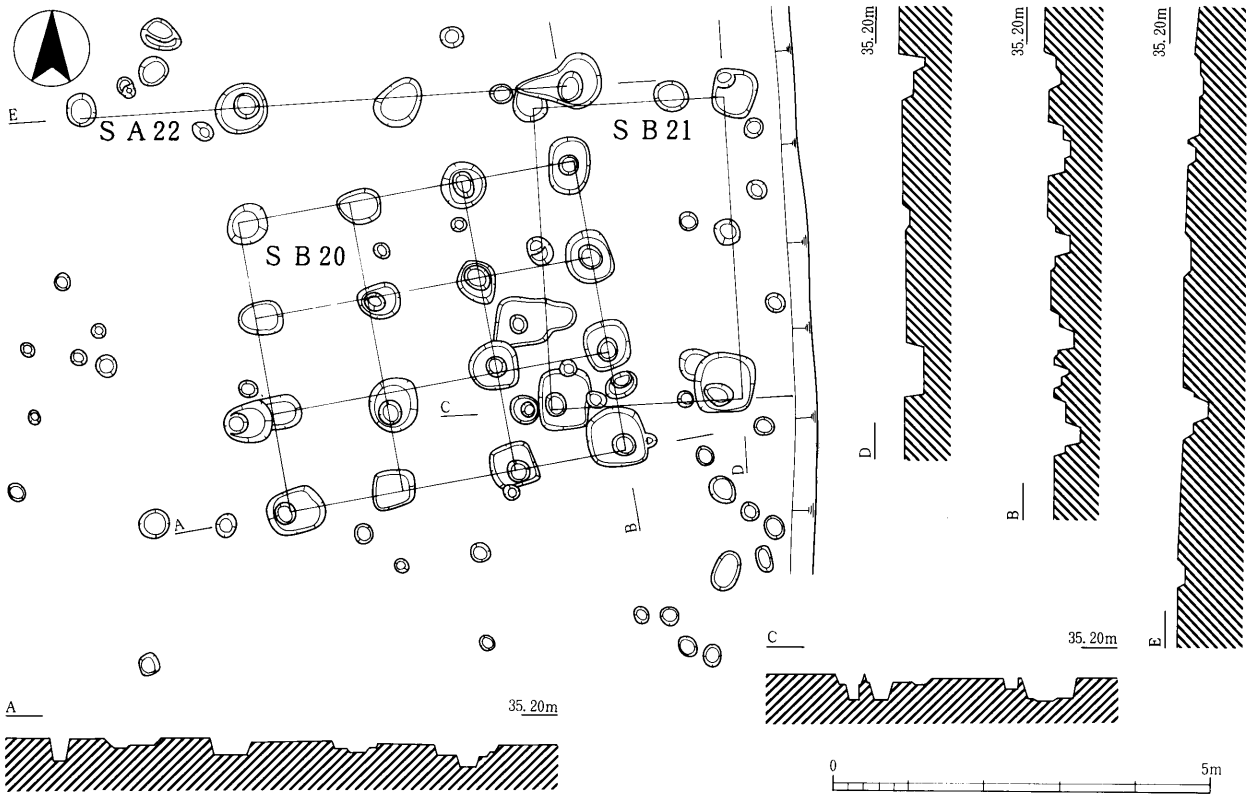
ＳＢ19　南北３間、東西２間を検出したのみで建物はさらに西へ続くと考えられる。柱間はどちらも2.0 mである。棟方向は北に対して22°東へ振っている。柱掘形は径30cm前後の円形である。

以上４棟の建物の時期については、いずれの建物の柱掘形埋土からも土師器・山茶椀の細片が出土しており、鎌倉時代後半と考えられる。また、ＳＢ19は、ＳＢ16あるいはＳＢ17と棟方向が似ており、どちらかと同じ時期に存在した可能性も考えられる。

Ｂ．土坑

ＳＫ８　中央調査区のＳＢ16のすぐ北で検出した。ＳＢ18と重複し、これより新しい土坑である。南北1.9m、東西2.7m、深さ10cm 前後と浅い。埋土は暗灰茶褐色土で土師器皿（27～32）・鍋（33～40）、陶器鉢（41）・山皿（42）・山茶椀（43～46）が整理箱３箱分出土している。量的には鍋が多い。

ＳＫ９　ＳＫ８と重複し、これより古い土坑である。規模は不明であるが、深さは10cm前後と浅い。埋土は黒色土で土師器皿・鍋、山茶椀が出土してい



第７図　ＳＢ20・ＳＢ21・ＳＡ22実測図（1：100）

第８図　ＳＢ16・ＳＢ17・ＳＢ18・ＳＢ19実測図（1：100）

るが、量も少なく、細片ばかりである。

ＳＫ10　ＳＫ８・９から約30m南に位置し、調査区の東端で検出した。さらに東へ続くため規模は不明だが、深さは20cm前後である。また、北端をＳＫ11に切られている。埋土は暗灰褐色土で土師器皿・鍋、山茶椀（52・53）、青磁椀が出土しているが量は少ない。

ＳＫ11　ＳＫ10と同じく東へ続くため規模は不明である。深さは15～20cmである。埋土は灰茶褐色土で土師器皿（47～51）・鍋が出土しているがやはり量は少ない。

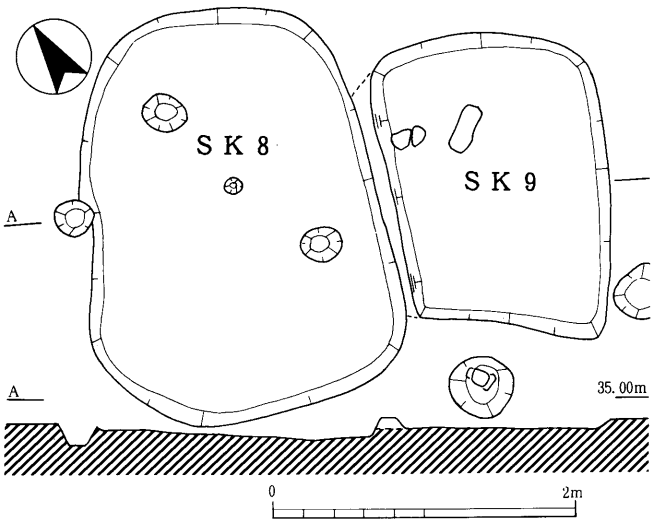
４．時期不明の遺構

Ａ．土坑

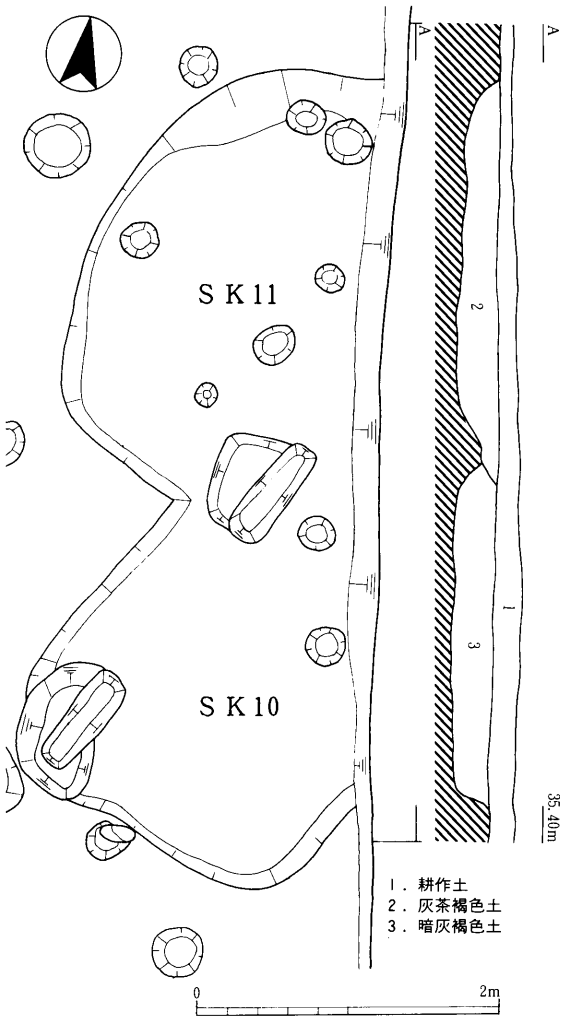
ＳＫ15　南調査区のＳＨ12の南東に位置する。南北2.2m、東西1.3mの隅丸長方形で、深さは16cm前後である。北端には30～40cmの偏平な石があり、さらに全面に２～５cm程の小石が敷き詰められており、その深さは８cm程である。石の下の埋土は黄茶褐色土である。遺物も含まれず、遺構の性格は不明である。

Ｂ．溝

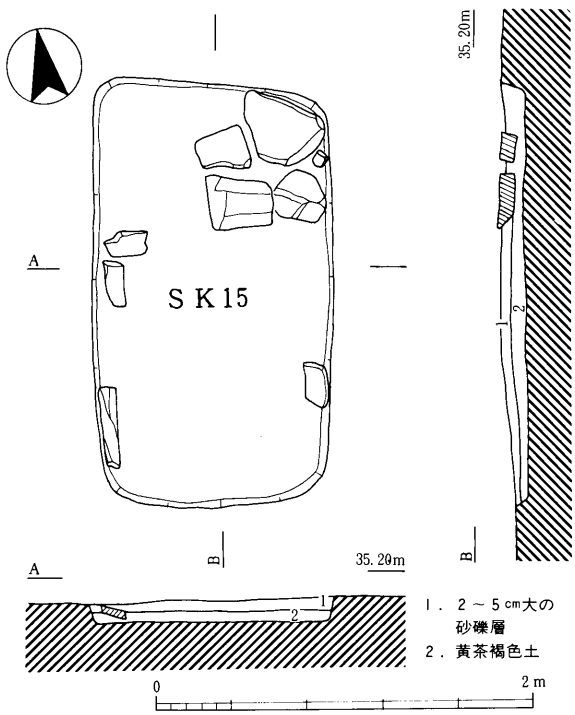
時期不明の溝には北調査区にＳＤ２・５～７、中央調査区にＳＤ13、南調査区にＳＤ14がある。このうち、ＳＤ２は北調査区の北端から南へ延びる溝でＳＸ１の２つの溝と重なるように二股に分かれ、調査区外へ続く。また、ＳＤ５・13は現在の農道と近接し、方向も同じである。



第９図　ＳＫ８・ＳＫ９実測図（1：50）



第10図　ＳＫ10・ＳＫ11実測図（1：50）



第11図　ＳＫ15実測図（1：40）

Ⅳ. 遺　　物

遺物は整理箱に20箱分出土したが、多くは細片のため図示し得なかった。また、遺跡が丘陵上に立地するためか、遺物の残存状況は悪く、詳細な器面の観察ができなかったものが多かった。以下、遺構毎に個々の遺物について述べる。

1．縄文時代の遺物

A．ＳＤ３出土の土器（1）

晩期末葉の突帯文土器であろう。口縁から少し下ったところに突帯を貼り付けている。胎土には砂粒を多く含み、色調は暗橙褐色である。

2．弥生時代の遺物

A．ＳＨ12出土の遺物（２～23）

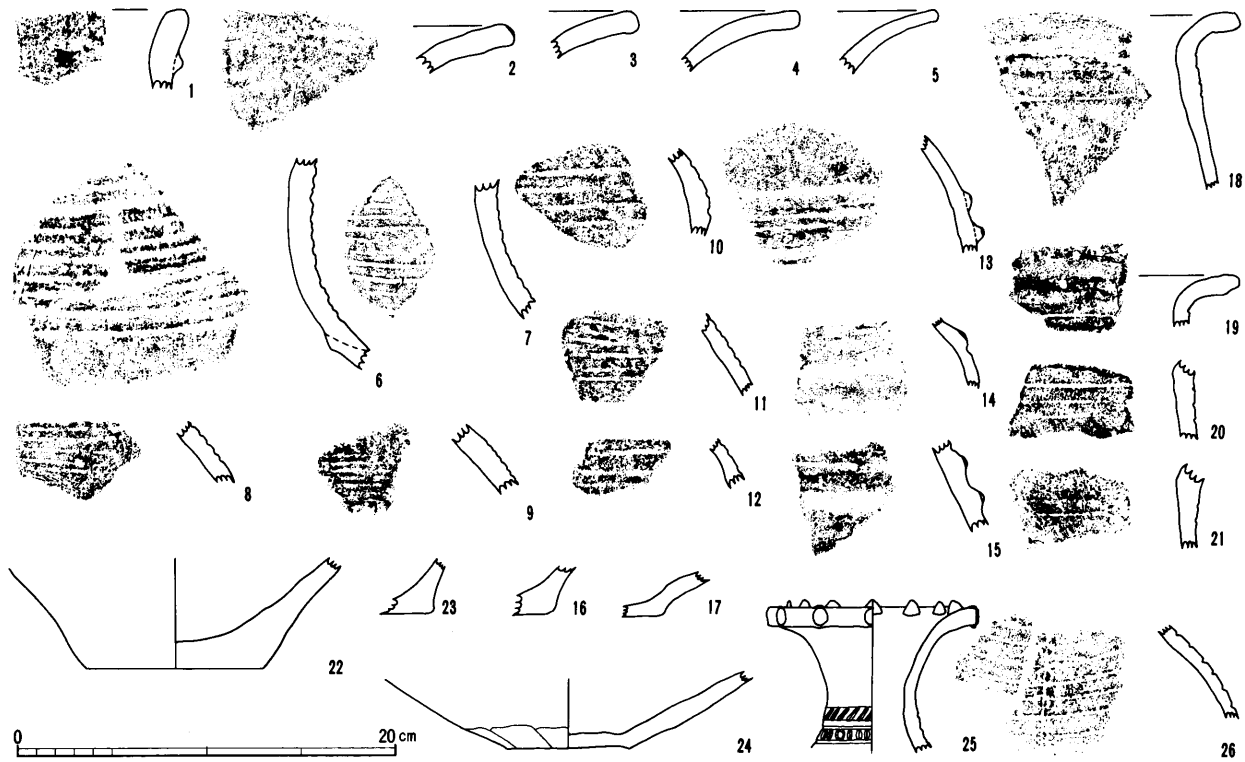
壷形土器

全体の形を窺えるものはなく、いずれも破片である。口縁部が大きく外反し、頸部には数条のヘラ描き沈線がめぐり、肩部より胴部にかけてヘラ描き沈線或いは突帯がめぐるものと思われる。いずれも胎土には砂粒を多く含む。

口縁部（２～５）　広口壷の口縁である。２は口縁端にヘラによると思われる刻目があるが、他のものには見られない。いずれの土器も内外面ともハケメを施した後にヘラミガキして仕上げている。特に４の内側は横方向、外側は縦方向のハケメの跡が良く残っている。いずれも色調は暗茶褐色で胎土には雲母片が見られる。

頸部（６・７）　現存する部分ではどちらも10条のヘラ描き沈線が確認できる。６は条溝の幅が４㎜前後と広く、条間は５㎜前後で細い沈線がある。さらに、ヘラ描き沈線がとぎれ、胴部へと続く部分には縦方向のハケメが見られる。内側には横方向のハケメも残っており、７とともにハケメを施した後にヘラミガキしてしあげている。どちらも色調は暗茶褐色である。

胴部（８～15）　ヘラ描き沈線がめぐるもの（８～12）と貼り付け突帯がめぐるもの（13～15）とに分かれる。ヘラ描き沈線がめぐるもののうち、10は４条であるが他は細片のため条数が不明で現状では３～７条が確認される。色調は10が暗黄褐色、他は



第12図　出土遺物実測図（１）（１～23・26は１：３、24・25は１：４）

暗茶褐色である。８・９の胎土には雲母片が見られる。貼り付け突帯がめぐるものの突帯の数は13・15が２条、14は１条である。突帯上には13・14がヘラによる刻目、15は指頭圧痕が見られる。色調は13が橙褐色、14が暗茶褐色、15が赤褐色である。

底部（16・17）　16と比べて17は外方に開き、器壁も薄い。色調はどちらも暗茶褐色である。

甕形土器

全体の形を窺えるものはなく、いずれも破片で、胎土には多くの砂粒を含む。

口縁部（18・19）　どちらも、口縁部が直角に近く外反し、わずかに肥厚する。残存状況が悪く端部に刻目が施されていたかどうかは不明である。18は頸部に半截竹管による横位直線文が２段めぐる。色調はどちらも暗茶褐色である。19の胎土には雲母片が見られる。

頸部（20・21）　20には２段、21には１段の半截竹管による横位直線文が施されている。21には縦方向のハケメも認められる。色調はどちらも暗茶褐色である。21の胎土には雲母片が見られる。

底部（22・23）　どちらも破片だが、22の推定底径は7.0cmである。色調は22が暗茶褐色、23が暗赤褐色である。

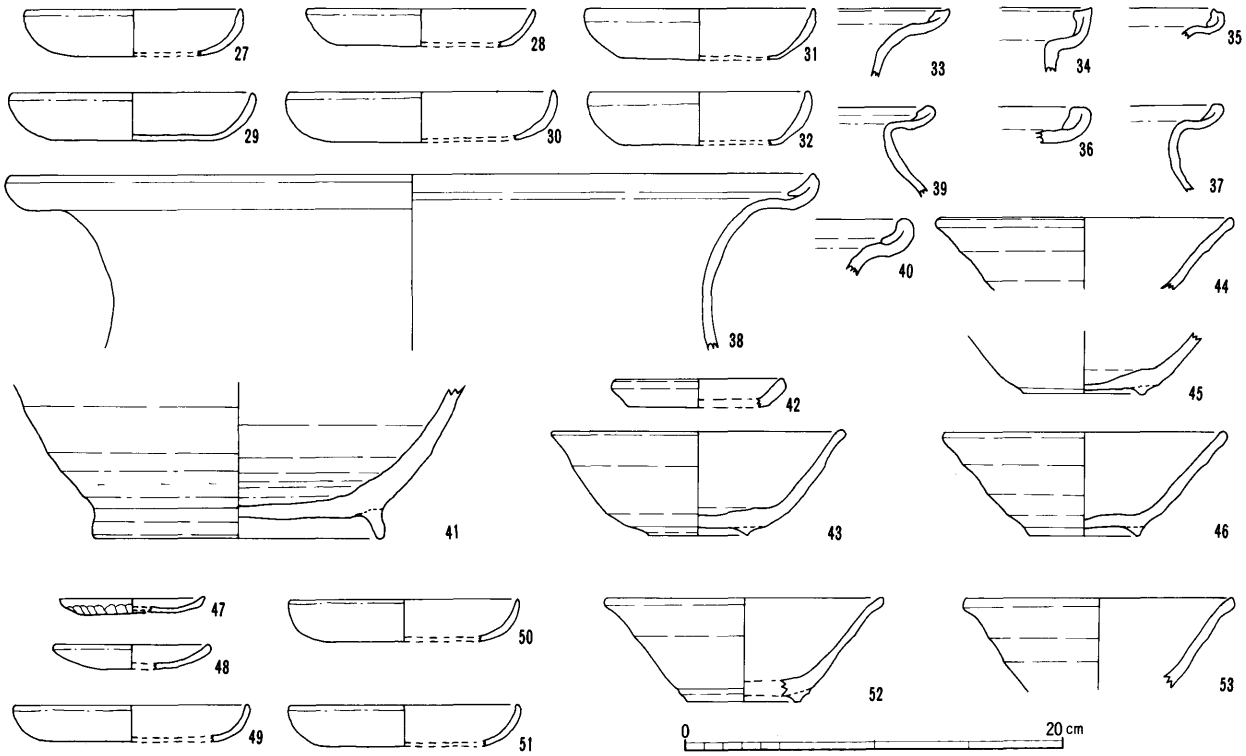
以上がＳＨ12出土の土器であるが、この他、サヌカイトの剝片も出土している。遺物の時期は壷形土器、甕形土器ともに前期の新段階に属する。甕形土器については口縁部が肥厚し、頸部には半截竹管による横位直線文が施されており、いわゆる「亜流遠賀川式土器」の系列に含まれるが、壷形土器については、口縁部内面の凹線や口縁端面の沈線が見られるものは１点もなく、「正統な遠賀川式土器」の系列に含まれる。

Ｂ．ＳＸ１出土の遺物（24）

僅かに上げ底になる壷形土器底部である。推定底径は6.4cmである。残存状況はよくないが、外面には横方向のヘラミガキが施されている。色調は暗黄褐色で胎土には砂粒を含む。焼成は良い。中期後半の土器である。

Ｃ．ＳＸ４出土の遺物（25・26）

25は細頸壷である。推定口径は11.0cmである。口縁端部には円形浮文を貼り付けている。円形浮文間の中心の間隔が2.9cmで12個あったと推定される。口縁部内面には瘤状突起が見られ、突起の中心の間隔が2.1cmで貼り付けられており、やはり12個あったと想定される。頸部には櫛状工具による斜状の連続刺突文が施され、その下部には、ヘラ状工具によ



第13図　出土遺物実測図（２）（１：４）

る２本の沈線の間に同じくヘラ状工具により連続刻目文が施される。また、刻目文の間に竹管文も見られるが単位は不明である。色調は橙褐色で、胎土には砂粒を含む。焼成は良い。26は壷形土器の体部の破片でヘラ描き沈線が横方向に施され、次に縦方向の沈線を施した後、縦方向の沈線上に竹管文が施される。色調は橙褐色で、胎土には砂粒を含む。焼成は良い。いずれも中期後半の土器である。

３．鎌倉時代の遺物

Ａ．ＳＫ８出土遺物（27～46）

土師器皿（27～32）

口縁部は内弯気味に直立し、端部は尖り気味に丸くおさめる。

土師器鍋（33～40）

破片が多く全体の形状がわかるものはないが、口縁端部断面の形状によってＡ・Ｂに大別される。鍋Ａ（33～37）は口縁端部の内側に折り返した部分の上端に面を持つものである。33～35は口縁端部上端に施されるヨコナデが強くなり内側の端部が突出する。特に35は顕著である。鍋Ｂ（38～40）は折り返した部分の先端に面を持たずに丸くおさまるものである。34は口縁端部の折り返し部分が立ち上がり受け口状をなす。37の頸部は直立気味である。また、36・40は他に比べ厚手である。新田分類[①]の６類、伊藤分類[②]の第２段階に相当する時期である。

鉢（41）

口縁部を欠く。体部はやや内弯気味にのびる。

山皿（42）

真っ直ぐにのびる体部である。高台は付かない。

山茶椀（43～46）

全体の形がわかるものは、43・46のみである。43の腰部は丸く口縁部はやや外反し端部を丸くおさめる。44は底部より直線的に体部がのび、口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。どちらも低く雑な高台が付き、内・外側ともナデている。外底は回転糸切り未調整である。藤沢編年[③]の第３段階第６形式に相当する時期である。

Ｂ．ＳＫ10出土遺物（52・53）

山茶椀（52・53）

体部はほぼ直線的で、口縁直下は若干外反する。口縁端部の断面は三角形に近くなる。

Ｃ．ＳＫ11出土遺物（47～51）

土師器小皿（47・48）

口縁部は正円にならず歪んでいる。端部は47が尖り気味であるの対し、48は丸くおさまる。

土師器皿（49～51）

口縁部は内弯気味に直立し、端部は尖り気味に丸くおさめる。

〔註〕

① 新田洋「平安時代～中世における煮炊用具――「伊勢型」鍋――に関する若干の覚書」『三重考古学研究』1985年　三重考古学談話会

② 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Miehistory』vol.1　1990年　三重歴史文化研究会

③ 藤澤良佑他『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要II』1983年　瀬戸市歴史民俗資料館

Ⅴ．結　　語

今回の調査は道路買収用地部分のみで幅は東西６～12m、南北に約190mであった。そのため、検出し得た遺構・遺物は僅かであり、丘陵上に広がる上の山遺跡全体の解明には至らなかったが、その様相を断片的に明らかにし得た。以下、遺構・遺物とに分けまとめたい。

先ず遺構についてであるが、弥生時代前期新段階の時期に相当する竪穴住居ＳＨ12を検出した。

前期の竪穴住居の検出例は、県下全域でもこれまで四日市市の大谷遺跡Ｂ地区ＳＢ１[①]、大谷遺跡Ｃ地区ＳＢ４[②]、松阪市鐘突遺跡ＳＢ６[③]、松阪市坊山１号墳墳丘下検出の２例[④]の合計５例だけであった。これらの住居の立地をみると松阪市鐘突遺跡の検出例は段丘縁辺部であるが、すべて丘陵上で平野部の遺跡での検出例は未だない。これらの住居のうち、その規模が確認されたものは、大谷遺跡Ｂ地区ＳＢ１が約30m²、Ｃ地区ＳＢ４が約15m²、当遺跡のＳＨ12が約23m²である。

伊勢地方における弥生文化の受容は前期中段階において各水系において拠点的にみられる。雲出川流域の中の庄遺跡、安濃川流域の納所遺跡、鈴鹿川流域の上箕田遺跡である。これに対し、雲出川以南においては前期新段階以降の遺跡しか確認されていない。当遺跡周辺の宮川流域では、当遺跡から約750m北に位置する仲垣内遺跡で土坑出土の資料がある[5]他は表採等の断片的資料が確認されているにすぎない。こういった状況において当遺跡で竪穴住居が検出され、集落の存在が確認された意義は大きく、櫛田川流域の金剛坂遺跡などのように、中の庄遺跡から南下するルートの遺跡の一つに位置付けられる。

次に中期後半の方形周溝墓ＳＸ１・４についてであるが、これまで当遺跡周辺の宮川流域の発掘調査例では、月よべ遺跡[6]・野垣内遺跡[7]・中楽山遺跡[8]で後期の方形周溝墓が検出されている。今回の調査で中期後半の方形周溝墓が検出されたことによりこの流域への方形周溝墓の墓制の導入は中期後半まで遡ることが確認された。また、ＳＸ４は長方形プランの形態と判断されるが、このような形態のものは、津市松の木遺跡[9]、明和町の古里遺跡[10]で確認されているものに続き県下では３例めである。

今回の調査では、弥生時代後期の遺構を検出していないが、当遺跡の北約400m に位置する勝田遺跡で弥生時代後期終末から古墳時代初頭にかけての竪穴住居が検出されている。その報告書では後期後半になると新しく宮川左岸段丘上に展開する集落と従来通り丘陵上に営まれる集落との二通りの在り方があると指摘されている[11]。今回の調査で現在の勝田の集落が在る丘陵上では、前期の新段階から伝統的に集落が営まれていることを明らかにし得た。

次に平安時代の遺構についてであるが、10世紀代前半の建物が２棟検出されている。神宮の祢宜であった荒木田氏の氏寺である田宮寺とは100mも離れておらず、その建立時期は10世紀末頃と想定されている[12]ことなども考えると当地域が神宮と非常に関連の強い地域であると指摘できよう。

次に鎌倉時代の後半の遺構であるが、当遺跡の南約150m に所在する楠ノ木遺跡の調査では、平安時代末から室町時代の遺構が検出されている。そしてそれらをⅠ期からⅣ期までの４時期に区分し、屋敷地の展開の考察がなされ、中心をなす主要建物とそれに付随する建物によって一集団をなすと指摘されている[13]。楠ノ木遺跡は丘陵に挟まれた谷部に集落を営んでいるのに対し、当遺跡は丘陵部を利用して集落を営んでいる違いはあるものの、部分的にしか検出していない当遺跡の建物を考える上で参考になろう。仮にＳＢ16・17を主要建物と想定した場合、30mほど南に建物としてはまとまらなかったがピット群がみられることから、この付近に付随する建物あるいは別の主要建物が想定できるかもしれない。

次に遺物についてであるが、ＳＨ12から弥生時代前期新段階の遺物が出土している。全体の形を窺えるものはない。壷形土器は「正統な遠賀川式土器」の系列に含まれ、甕形土器は「亜流遠賀川式土器」の系列に含まれるものである。

「正統な遠賀川式土器」と「亜流遠賀川式土器」のあり方については鈴木克彦氏の所論[14]が詳しいが、その中で両者を区別する上で最も顕著な特徴として、「亜流遠賀川式土器」の壷形土器においては口縁部内面の凹線、甕形土器にあっては頸部の半截竹管による横位直線文であると指摘している。

今、当遺跡近辺の前期新段階の遺跡の出土遺物をみるならば、仲垣内遺跡出土の壷形土器[15]は、口縁端面に沈線・刻目が施され、内面には凹線がみられる。明和町に所在する古里遺跡[16]・金剛坂遺跡[17]・神前山遺跡[18]は、「亜流遠賀川式土器」が主体をなす遺跡であるがやはり、仲垣内遺跡の壷形土器と同様である。このように当遺跡出土の新段階の土器の中で壷形土器に限っては他の遺跡とは異なった傾向にあると指摘できる。

和気清章氏は「亜流遠賀川式土器」の成立について、前期新段階前半に「正統な遠賀川式土器」の在地化の過程の中で捉えられるものであると考えられ、その主体的な地域は宮川水系を主流として成立したものであると指摘している[19]。また、鈴木氏は前述の論考の中で「亜流遠賀川式土器」の成立について、これまでの①２系統併存説[20]・②立地差説[21]・③１系統時期差説[22]について検討し、「亜流遠賀川式土器」とは前期新段階に伊勢地方中南部を中心として伊勢湾西岸地方に分布する、「正統な遠賀川式土器」とは別系統の土器様式であるとまとめることができよう

とした上で「亜流遠賀川式土器」にみられる縄文的要素について、遺跡の立地・分布や出土状況にその要素を見出すことができると指摘している。そして、この縄文的要素が今後の研究の課題であるとしている。

こういった研究をふまえ、当遺跡についてまとめたい。当遺跡では僅かに１点ではあるが、縄文時代晩期の凸帯文土器が出土しており、晩期縄文文化を主体とする集団の存在が想定される。当遺跡において見られる壷形土器は「正統な遠賀川式土器」の系列、甕形土器は「亜流遠賀川式土器」の系列といった特徴は、前期中段階に中ノ庄遺跡にもたらされた弥生文化が南下する過程で在地化し、「正統な遠賀川式土器」の在地化の過程の中で成立する「亜流遠賀川式土器」の在地化の差と考えたい。

〔註〕

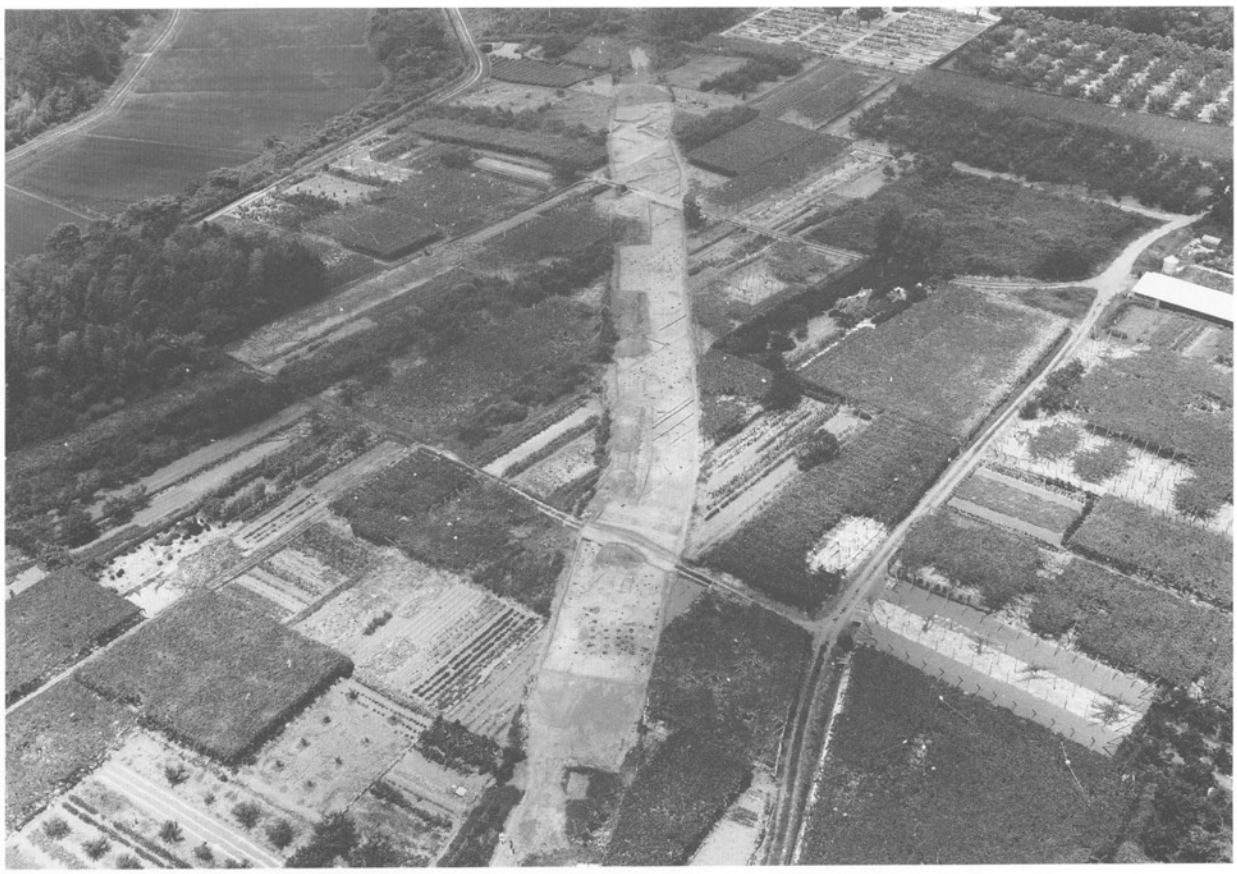
① 小玉道明　『大谷遺跡発掘調査報告－Ａ地区・Ｂ地区－』1967年　四日市市教育委員会
② 小玉道明　『大谷遺跡発掘調査報告Ⅱ－Ｃ地区の遺構－』1976年　四日市市教育委員会
③ 下村登良男　『鐘突遺跡発掘調査報告書』1981年　松阪市教育委員会
④ 下村登良男　『坊山１号墳発掘調査報告』1986年　松阪市教育委員会　また、竪穴住居について松阪市教育委員会　西田尚史氏に御教示をいただいた。
⑤ 小玉道明　「度会郡玉城町　仲垣内遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域発掘調査報告』1979年　三重県教育委員会
⑥ 小玉道明他　「度会郡玉城町　月よべ遺跡」　同上
⑦ 下村登良男　「伊勢市上地町　野垣内遺跡」　同上
⑧ 下村登良男　「伊勢市上地町・中楽山遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域発掘調査報告』1973年　三重県教育委員会
⑨ 村木一弥他　「松ノ木遺跡」『一般国道23号線中勢道路　埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』1990年　三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター
⑩ 山澤義貴・谷本鋭次　『古里遺跡発掘調査報告－Ｄ地区』1974年　三重県教育委員会
⑪ 倉田直純・東浩成　『勝田遺跡発掘調査報告』1988年　三重県教育委員会
⑫ 平松令三監修　『三重県の地名』1983年　平凡社
⑬ 伊藤裕偉　「楠ノ木遺跡」『近畿自動車道（勢和～多気）埋蔵文化財発掘調査報告－第３分冊－』1991年　三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター
⑭ 鈴木克彦　「「亜流遠賀川式土器」再考」『Miehistory』vol.2　1990年　三重歴史文化研究会
⑮ 註⑤に同じ
⑯ 註⑩に同じ
⑰ 山澤義貴・谷本鋭次　『金剛坂遺跡発掘調査報告』1971年　明和町教育委員会
⑱ 下村登良男　『神前山１号墳発掘調査報告』1973年　明和町教育委員会
⑲ 和気清章　「三重県における稲作の受容」『東日本における稲作の受容－畿内第Ⅰ様式併行期の土器－（第３分冊）』1991年　東日本埋蔵文化財研究会
⑳ 紅村弘　「遠賀川系文化成立の構想」『考古学研究』第29巻第１号　1982年　考古学研究会
紅村弘　『弥生時代成立の研究』1983年
㉑ 註⑰に同じ
㉒ 小玉道明・伊藤洋他　『永井遺跡発掘調査報告』1973年　四日市市教育委員会

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
27	4-4	土師器 皿	J23・SK8	11.4	2.5		外：オサエとナデ 口縁端部ヨコナデ 内：ナデ	密	良	灰黄褐色	口縁25	
28	4-3	土師器 皿	J23・SK8	12.0	2.0		外：オサエとナデ 口縁端部ヨコナデ 内：ナデ	密	良	淡黄褐色	口縁20	
29	4-14	土師器 皿	J23・SK8	12.8	2.5		外：オサエとナデ 口縁端部ヨコナデ 内：ナデ	密	良	淡黄褐色	100	
30	4-1	土師器 皿	J23・SK8	14.0	2.7		外：オサエとナデ 口縁端部ヨコナデ 内：ナデ	密	良	淡黄褐色	口縁25	
31	4-2	土師器 皿	J23・SK8	12.0	2.7		外：オサエとナデ 口縁端部ヨコナデ 内：ナデ	密	良	淡黄褐色	口縁25	
32	5-6	土師器 皿	J23・SK8	11.4	2.8		外：オサエとナデ 口縁端部ヨコナデ 内：ナデ	密	良	淡黄褐色	口縁25	
33	4-11	土師器 鍋	J23・SK8	—	—		外：オサエとナデ 口縁端部ヨコナデ 内：オサエとナデ	密1.0～2.0㎜の砂粒含む	良	淡黄褐色	口縁10以下	
34	4-9	土師器 鍋	J23・SK8	—	—		外：オサエとナデ 口縁端部ヨコナデ 内：オサエとナデ	密1.0～2.0㎜の砂粒含む	良	淡黄褐色	口縁10以下	外面に煤付着
35	4-13	土師器 鍋	J23・SK8	—	—		外：オサエとナデ 口縁端部ヨコナデ 内：オサエとナデ	密1.0～2.0㎜の砂粒含む	良	淡黄褐色	口縁10以下	
36	4-12	土師器 鍋	J23・SK8	—	—		外：オサエとナデ 口縁端部ヨコナデ 内：オサエとナデ	密1.0～2.0㎜の砂粒含む	良	淡黄褐色	口縁10以下	外面に煤付着
37	4-10	土師器 鍋	J23・SK8	—	—		外：オサエとナデ 口縁端部ヨコナデ 内：オサエとナデ	密1.0～2.0㎜の砂粒含む	良	淡黄褐色	口縁10以下	外面に煤付着
38	5-1	土師器 鍋	J23・SK8	42.4	—		外：オサエとナデ 口縁端部ヨコナデ 内：オサエとナデ	密1.0～2.0㎜の砂粒含む	良	淡黄褐色	口縁10	外面に煤付着
39	4-8	土師器 鍋	J23・SK8	—	—		外：オサエとナデ 口縁端部ヨコナデ 内：オサエとナデ	密1.0～2.0㎜の砂粒含む	良	淡黄褐色	口縁10以下	
40	4-7	土師器 鍋	J23・SK8	—	—		外：オサエとナデ 口縁端部ヨコナデ 内：オサエとナデ	密1.0～2.0㎜の砂粒含む	良	淡黄褐色	口縁10以下	
41	5-3	陶器 鉢	J23・SK8	—	—	底径15.2	外：ロクロナデのちロクロケズリ高台ヨコナデ 内：ロクロナデ 底部はナデ	やや密1.0～6.0㎜の小石含む	良	淡灰色	底部～体部40	
42	4-5	陶器 小皿	J23・SK8	8.8	1.5	底径7.4	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密1.0～2.0㎜の砂粒含む	硬	白灰色	口縁20	
43	5-4	陶器 椀	J23・SK8	15.4	5.5	底径5.2	外：ロクロナデのち糸切りのち高台ヨコナデ 内：ロクロナデ 底部はナデ	密1.0㎜の砂粒含む	硬	灰白色	40	山茶椀
44	4-6	陶器 椀	J23・SK8	15.4	—		外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密2.0～4.0㎜の小石含む	硬	灰白色	口縁25	山茶椀
45	5-5	陶器 椀	J23・SK8	—	—	底径6.4	外：ロクロナデのち糸切りのち高台ヨコナデ 内：ロクロナデ 底部はナデ	密1.0㎜の砂粒含む	硬	灰白色	底部～体部30	山茶椀
46	5-2	陶器 椀	J23・SK8	15.0	5.5	底径5.8	外：ロクロナデのち糸切りのち高台ヨコナデ 内：ロクロナデ 底部はナデ	密1.0～3.0㎜の小石含む	硬	灰白色	60	山茶椀 高台に籾殻痕
47	6-4	土師器 小皿	J31・SK11	7.6	0.8		外：オサエとナデ 内：ナデ	密1.0㎜の砂粒含む	良	淡黄褐色	90	
48	6-5	土師器 小皿	J31・SK11	8.0	1.3		外：オサエとナデ 内：ナデ	密1.0㎜の砂粒含む	良	淡黄褐色	25	
49	6-3	土師器 皿	J31・SK11	12.2	2.0		外：オサエとナデ 口縁端部ヨコナデ 内：ナデ	密1.0㎜の砂粒含む	良	淡黄褐色	口縁20	
50	6-1	土師器 皿	J31・SK11	12.0	2.2		外：オサエとナデ 口縁端部ヨコナデ 内：ナデ	密1.0㎜の砂粒含む	良	淡黄褐色	口縁20	
51	6-2	土師器 皿	J31・SK11	12.0	2.2		外：オサエとナデ 口縁端部ヨコナデ 内：ナデ	密1.0㎜の砂粒含む	良	淡黄褐色	口縁20	
52	6-7	陶器 椀	J32・SK10	14.6	5.5	底径6.0	外：ロクロナデのち高台ヨコナデ 内：ロクロナデ	密2.0～3.0㎜の小石含む	良	灰白色	20	山茶椀
53	6-6	陶器 椀	J32・SK10	14.2	—		外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密2.0～3.0㎜の小石含む	良	灰白色	口縁25	山茶椀

第1表　出土土器観察表

図　　版

調査前風景（南から）

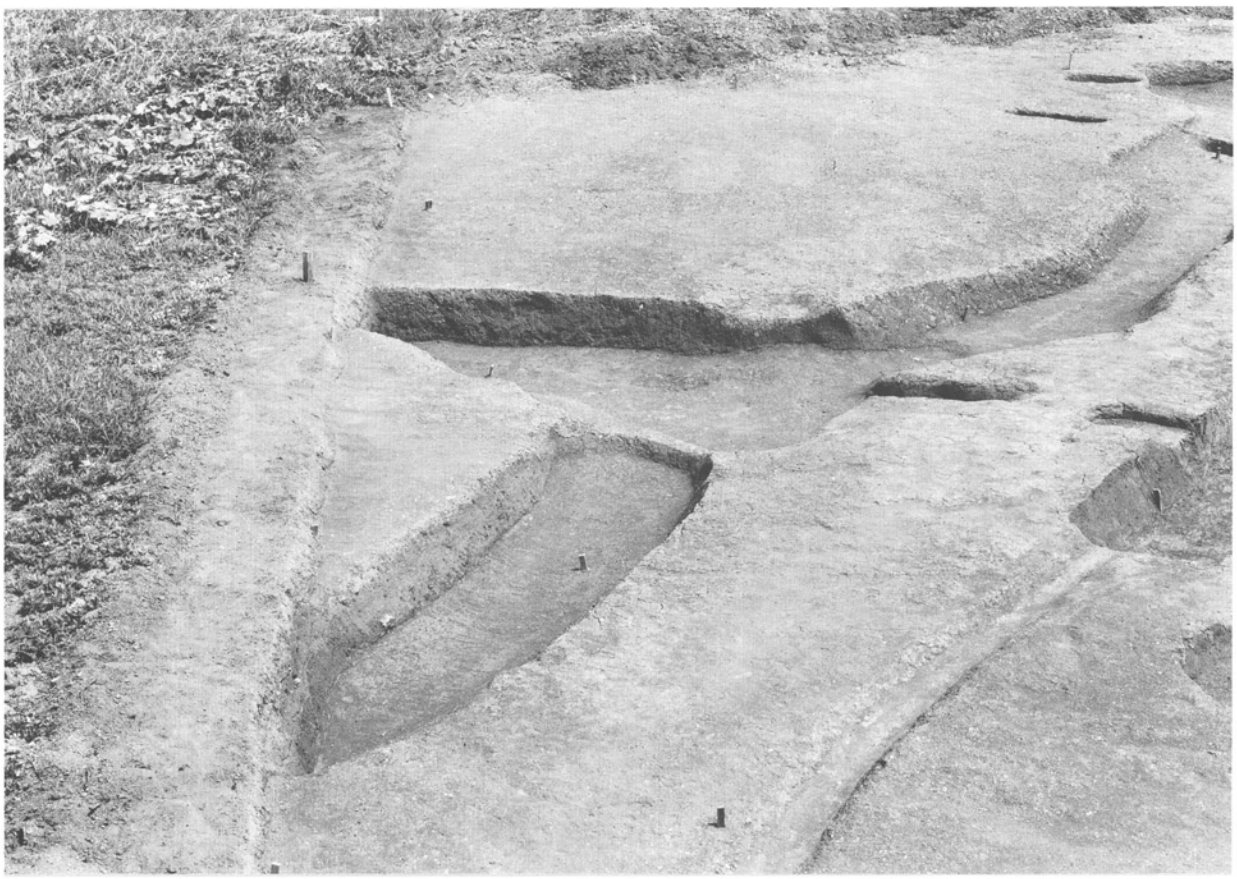


調査区全景（南上空から）

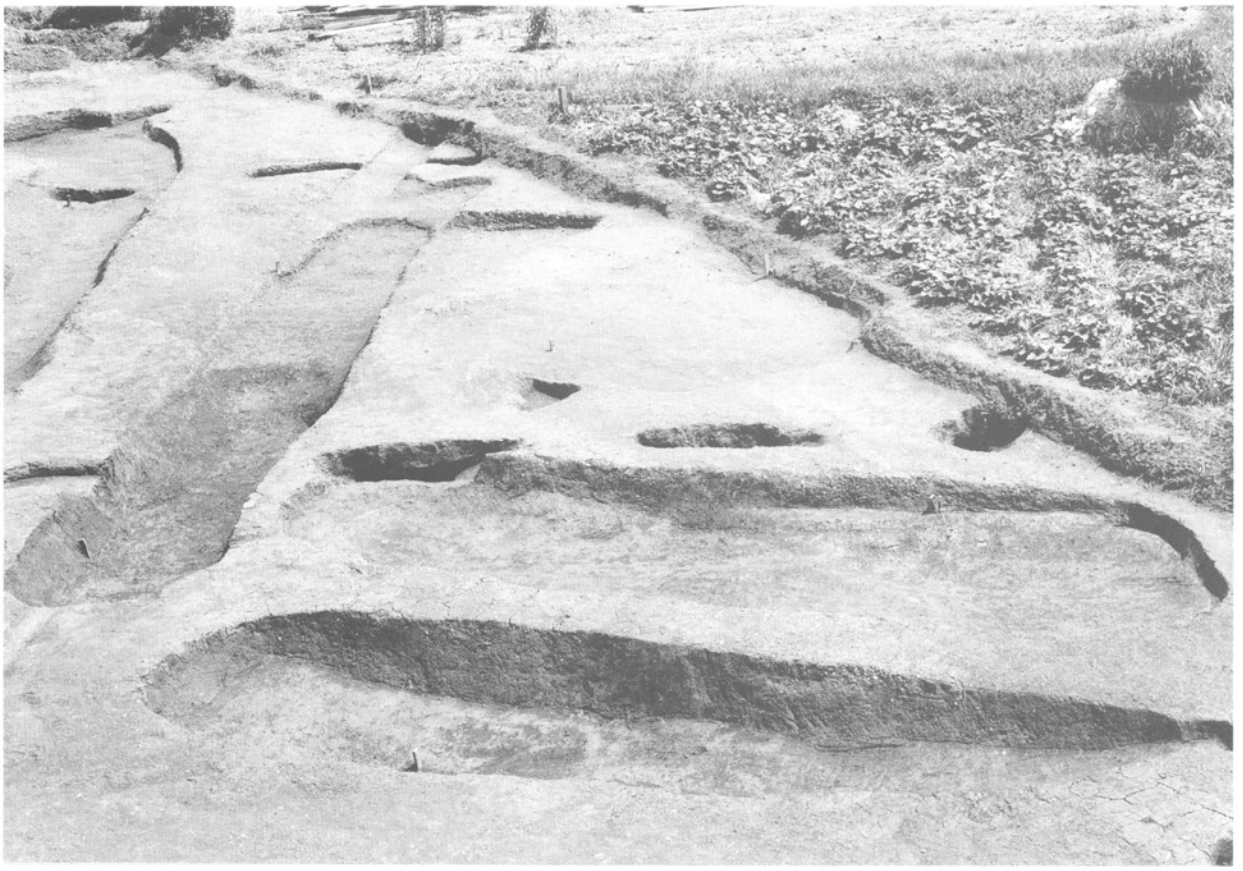
北調査区全景（南から）

中央調査区全景（南から）

竪穴住居ＳＨ12（南から）



方形周溝墓ＳＸ１（南西から）



方形周溝墓ＳＸ４，溝ＳＤ３（南西から）

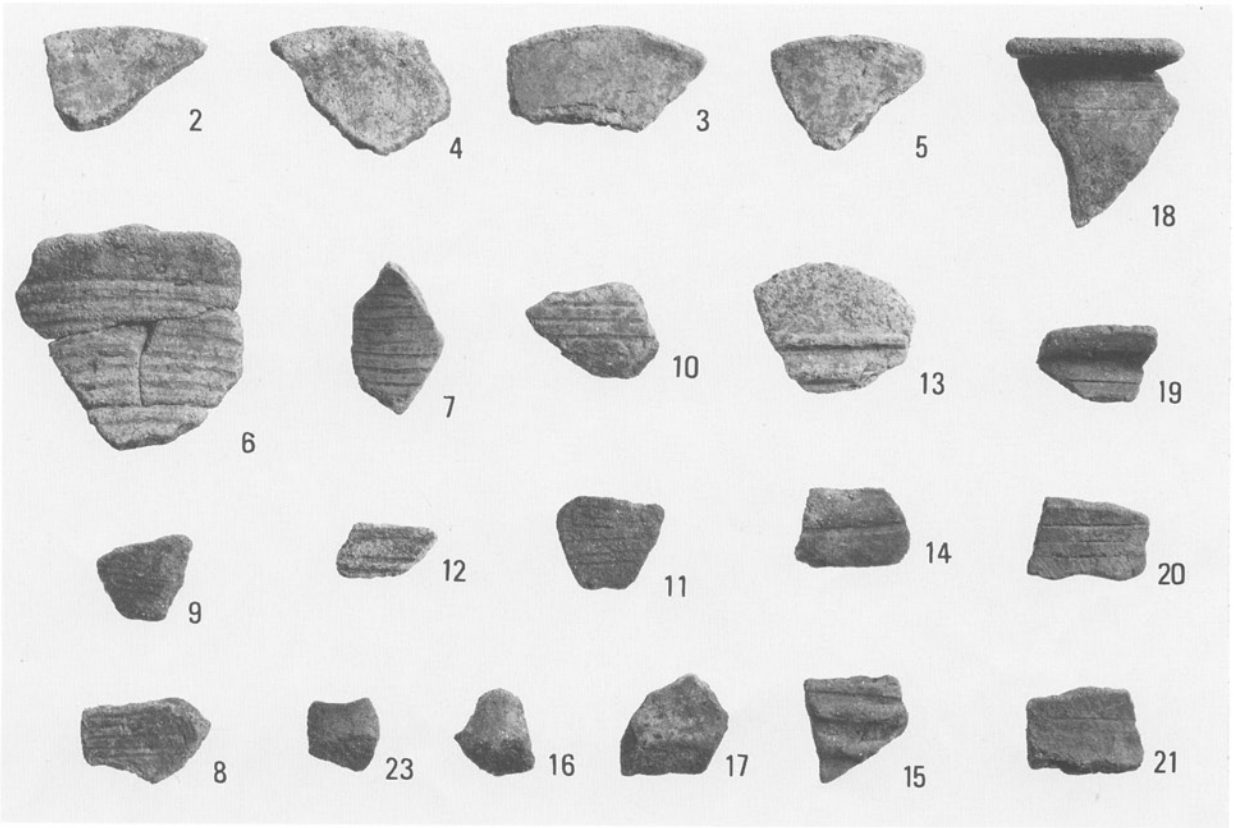
掘立柱建物ＳＢ20・ＳＢ21・ＳＡ22(南から)

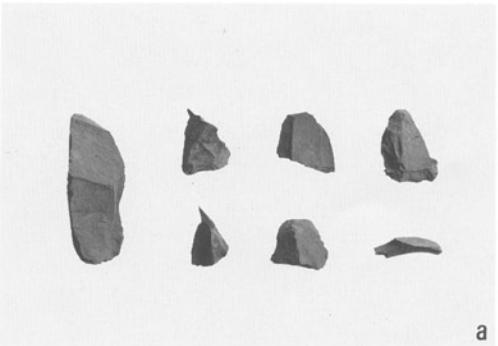
掘立柱建物ＳＢ16・ＳＢ17・ＳＢ18・ＳＢ19(南西から)

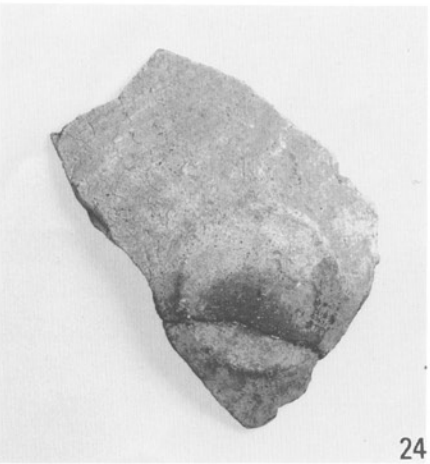
土坑ＳＫ８・ＳＫ９（南西から）

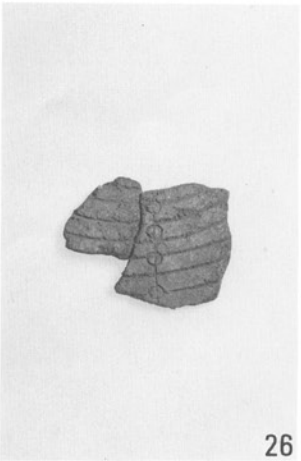
土坑ＳＫ10・ＳＫ11（南から）

土坑ＳＫ15（南から）

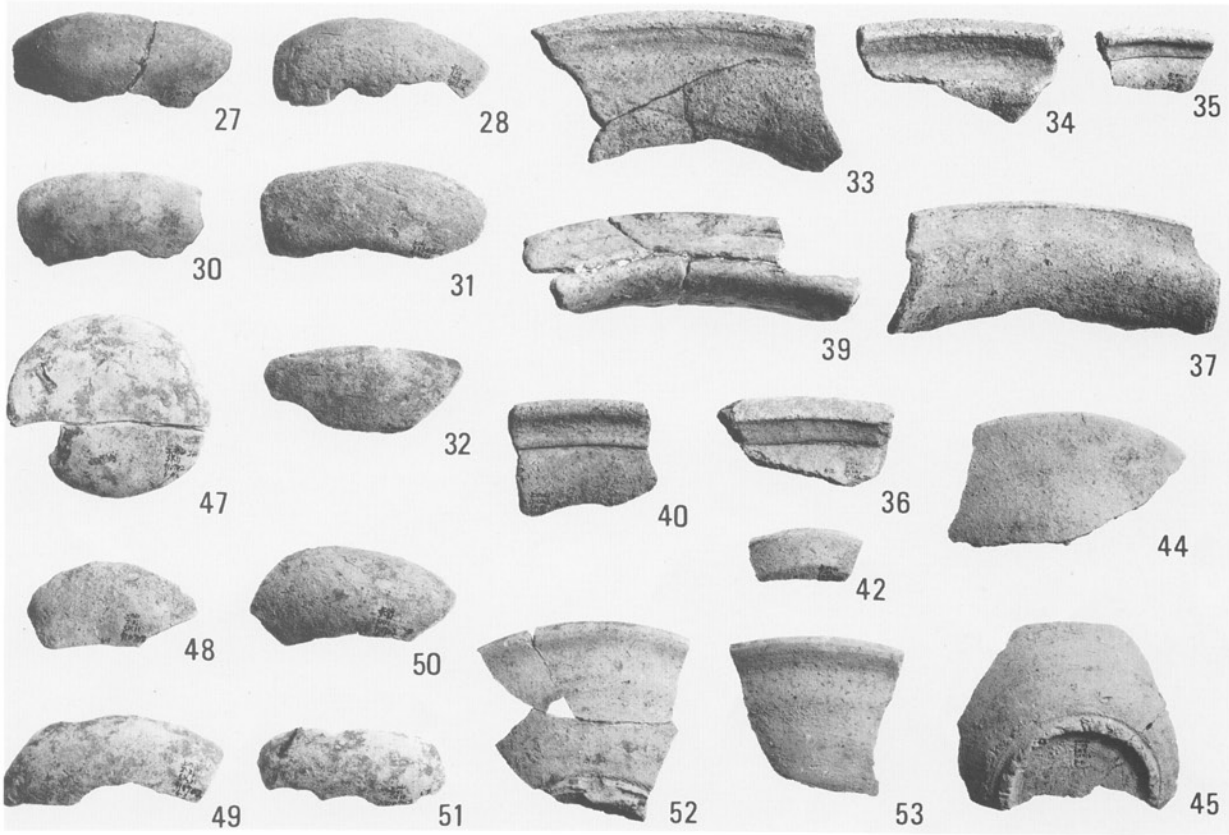


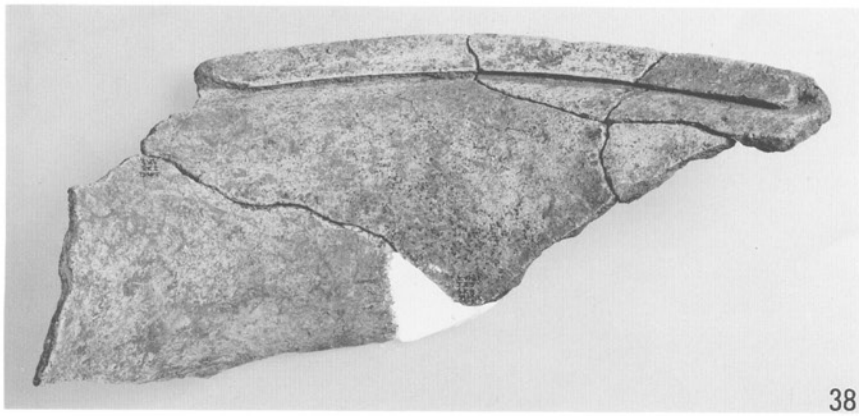


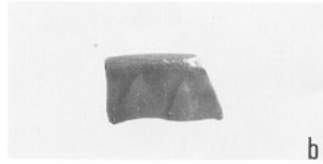


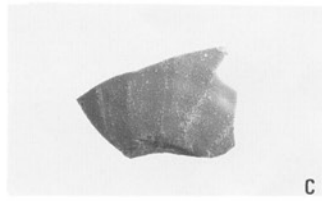


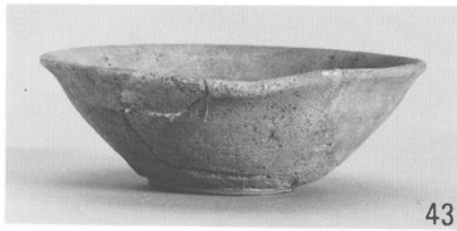
出土遺物（1）（1：3）（1はＳＤ３，２～23・ａはＳＨ12，24はＳＸ１，25・26はＳＸ３　出土）

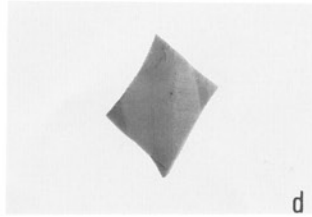


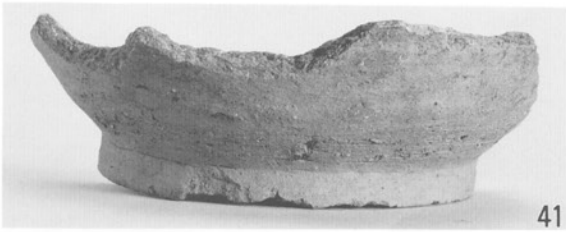


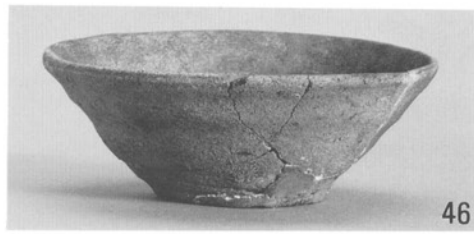












出土遺物（２）（１：３）（27～46・ｄはＳＫ８，52・53・ｂはＳＫ10，47～51はＳＫ11　出土）

平成4(1992)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年1月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告103

一般県道度会玉城線道路改良事業に伴う

上の山遺跡発掘調査報告

―― 度会郡玉城町勝田 ――

1992(平成4)年3月

編　集　三重県教育委員会
発　行　三重県埋蔵文化財センター

印　刷　オリエンタル印刷株式会社